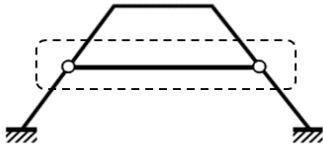
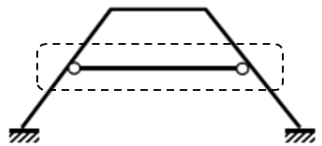
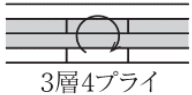



頁	章・節	項目		誤	正	ページ 差替え データ	掲載日
678	10.6.5	式10.6.17	左辺	$\frac{tR_u}{t}$	$\frac{tR_a}{t}$	—	2023.10.27
704 705	10.7.5	表10.7.9	断面1次モーメント	$A_e$	$S_0$	—	2023.10.4
84	3.1.1	図3.1.1	図中、上から3段目	大規模建築物	大規模建築物 中規模建築物	—	2023.9.24
86	3.1.1	図3.1.2	図中、上から3段目	大規模建築物	大規模建築物 中規模建築物	—	2023.9.24
89	3.1.1	図3.1.3	図中、 ルート2の下から3段目	③冷間成形角形鋼管柱の梁の応力の 割増しによる許容応力度計算の実施	③冷間成形角形鋼管柱の梁に対する耐力比の確保	—	2023.9.24
114	3.2.4	B. (1)	③ 1行目	～保有耐力接合 <sup>6)</sup>	～保有耐力接合 <sup>6)</sup> (7.11.6(4)参照)	—	2023.9.24
117	3.2.4	B. (2)	④ 1行目	～次の幅厚比以下にあること～	～次の幅厚比が制限値(表3.2.7)以下にあること～	—	2023.9.24
117	3.2.4	B. (2)	式3.2.11	$B/t$ または $D/t \leq$ 幅厚比の制限値 (表3.2.7)	H形鋼 フランジ $b/t_f$ , ウェブ $d'/t_w$ 角形鋼管または円形鋼管 $D/t$ $b, t_f, d', t_w, D, t$ : 表7.6.1, 表7.7.1参照	○	2023.9.24
117	3.2.4	B. (2)	応力の割増し等 (ルート2)	(追記)	⑥～ ⑦柱脚部と基礎との接合部に十分な強度または靱性があることを確かめる (7.8柱脚参照)	—	2023.9.24
339	6.7.2	(4) ①	2行目、3行目	引張鉄筋に対しては式(6.7.8), 圧縮鉄筋に対しては式(6.7.9)による	引張鉄筋に対しては式(6.7.10), 圧縮鉄筋に対しては式(6.7.11)による	—	2023.9.24
481	7.11.6	(4) ①	記号の説明	(追記)	$A_d$ : 筋交い材の欠損断面積 (mm <sup>2</sup> ) 有効断面積の計算については7.5.1参照	—	2023.9.24

頁	章・節	項目		誤	正	ページ 差替え データ	掲載日
701	10.7.5	式10.7.25	右辺	$1/2 \sqrt{(\sigma_g + 2\sigma)^2 - \sigma_g^2}$	$1/2 \sqrt{(\sigma_g + 2\sigma_d)^2 - \sigma_g^2}$	—	2023.7.19
691	10.7.2	式10.7.10	$\alpha$ の条件	$\alpha \geq 0.7$	$\alpha \leq 0.7$	—	2023.7.19
328	6.6.2	式6.6.6	右辺 { } 内の第2項	$+0.18 \sqrt{p_w \cdot \sigma_{wy}}$	$+0.85 \sqrt{p_w \cdot \sigma_{wy}}$	—	2023.6.6
※「机上版2刷」は以下を反映しています。							
35	2.1	表2.1.1	1行目、断面2次半径	$\sqrt{\frac{D^2 + d^2}{4}}$	$\frac{\sqrt{D^2 + d^2}}{4}$	—	2022.1.10
38	2.2	表2.2.1	中空円筒（表最下段） k式	$k = 4/3 (1 - Dd / (D^2 + d^2))$	$k = 4/3 (1 + Dd / (D^2 + d^2))$	—	2023.3.19
39	2.3.3	右下図	接点形式			—	2022.4.29
46	2.6	表2.6.1	下から2番目の項 最大曲げモーメント（両端支持、両端固定）の欄	$(l - a \leq x \leq l - 2a)$	$(a \leq x \leq l - a)$	○	2020.8.25
189	4.4	(1)	11行目	～またはSRC造	～またはSRC造を除く	—	2020.9.19
233	5.2.3	表5.2.3	表のタイトル	方づえを有する構面の等価な壁量値 (mm)	方づえを有する構面の等価な壁量値	—	2020.8.25
247	5.4.1	表5.4.3	記号凡例	$I_A = \Sigma (E_i I_i + E_i A_i Z_i^2)$	$I_A = \Sigma (E_i I_i + E_i A_i Z_i^2) / E_0$	—	2023.4.14

頁	章・節	項目	誤	正	ページ 差替え データ	掲載日	
251	5.4.1	D.	図5.4.2 強軸方向 3層4プライ 		—	2023.4.14	
296	6.4.2	式6.4.13	右辺	$Q_0 = (\lambda/4 \pm 1/8) w l_x^2$	$Q_0 = (\lambda/4 \pm 1/8) w l_x^2$	<a href="#">○</a>	2021.6.8
297	6.4.2	図6.4.7	図のタイトル	床梁応力計算図表(7)	小梁2本架かる場合の床梁応力(C)計算	<a href="#">○</a>	2020.9.19
297	6.4.2	図6.4.8	図のタイトル	床梁応力計算図表(8)	小梁2本架かる場合の床梁応力(M <sub>0</sub> )計算	<a href="#">○</a>	2020.9.19
297	6.4.2	図6.4.9	図のタイトル	床梁応力計算図表(9)	小梁2本架かる場合の床梁応力(Q <sub>0</sub> )計算	<a href="#">○</a>	2020.9.19
297	6.4.2	式6.4.16	右辺	$Q_0 = (\lambda/2 + 1/8) w l_x^3$	$Q_0 = (\lambda/2 + 1/8) w l_x^2$	<a href="#">○</a>	2020.9.19
389	6.9	表6.9.11 (b)	片隅フック・フック後曲げの表	<a href="#">別紙1-1(先曲げの表に訂正)</a>		<a href="#">○</a>	2020.9.19
390	6.9	表6.9.11 (c)	交互フック・フック後曲げの表	<a href="#">別紙1-2(先曲げの表に訂正)</a>		<a href="#">○</a>	2020.9.19
401	7.2.2	表7.2.5	許容応力度、脚注	<a href="#">別紙6(許容応力度の訂正、脚注の追記)</a>		<a href="#">○</a>	2021.8.3
404	7.3.4	式7.3.6	下式	かつ $f_{ts} \leq f_{to}$	削除	—	2022.5.26
434	7.9	7.9.2	ボルト接合部の許容応力	<a href="#">別紙8(ボルト接合部の許容応力)</a>		<a href="#">○</a>	2022.12.11
436	7.9.4	表7.9.2	長期許容せん断耐力 長期許容支圧力	<a href="#">別紙8(中ボルトの許容耐力表)</a>		<a href="#">○</a>	2022.12.11
437	7.9.4	表7.9.3 及び 表7.9.4	1行目	設計ボルト張引	設計ボルト張力	<a href="#">○</a>	2020.11.29

頁	章・節	項目		誤	正	ページ 差替え データ	掲載日
437	7.9.4	表7.9.4	許容せん断力の列	<a href="#">別紙4(M12追加、許容せん断力の訂正)</a>		○	2020.11.29
441	7.10	7.10.5	項の見出し 7.9.5式 記号凡例	7.10.5 応力度の計算方法 7.9.5式 右辺分母 $\Sigma(aL)$ $L$ : 溶接継目の有効長 (mm) ( $L \leq$ 溶接継目の実長 - のど厚) a : のど厚 (mm) (追記)	7.10.5 すみ肉溶接の応力度の計算方法 7.9.5式 右辺分母 $\Sigma(aL_e)$ $L_e$ : 溶接継目の有効長さ (mm) ( $L_e =$ 溶接継目の実長 - $2S$ ) a : のど厚 (mm) (=0.7S) $S$ : すみ肉溶接のサイズ (mm)	-	2022.12.18
480	7.11.6	A. (2)	右表	軸径 16 20	軸径 M16 M20	-	2021.8.22
480	7.11.6	A. (2)	右表	軸径 22の列 (ピッチ、はしあきとも)	削除 (表7.11.13~7.11.16において使用していないため)	-	2021.8.22
486	7.11.6	表7.11.13	脚注	(追記)	・筋かい端部および接合部の破断耐力については、母材の終局耐力の1.2倍以上の耐力があることを確認している(保有耐力接合)。	○	2020.11.29
488	7.11.6	表7.11.14	脚注	(追記)	・筋かい端部および接合部の破断耐力については、母材の終局耐力の1.2倍以上の耐力があることを確認している(保有耐力接合)。	○	2020.11.29
490	7.11.6	表7.11.15	ボルトの本数-径の列	<a href="#">別紙5(ボルトの本数の訂正、脚注の追記)</a>		○	2020.11.29
492	7.11.6	表7.11.16	脚注	(追記)	・筋かい端部および接合部の破断耐力については、母材の終局耐力の1.2倍以上の耐力があることを確認している(保有耐力接合)	○	2020.11.29
504	7.16.1	表7.16.1	断面積の列	<a href="#">別紙3-1(断面積の訂正)</a>		○	2020.11.3

頁	章・節	項目	誤	正	ページ 差替え データ	掲載日	
504	7.16.1	表7.16.1	重心の位置の列	別紙3-1(重心の位置の訂正)		○	2020.11.14
505	7.16.1	表7.16.1 (つづき)	断面積の列	別紙3-2(断面積の訂正)		○	2020.11.3
505	7.16.1	表7.16.1 (つづき)	重心の位置の列	別紙3-2(重心の位置の訂正)		○	2020.11.14
514	7.16.1	表7.16.6	300×200の行 断面2次モーメント I <sub>x</sub>	1110	11100	○	2021.2.23
515	7.16.1	表7.16.6	600×200*の行 断面2次半径 i <sub>x</sub>	208	238	○	2021.2.23
541	7.16.3	表7.16.22	頭付きスタッドの表	別紙2(JIS 2011年改定版に訂正)		○	2020.9.19
541	7.16.3	表7.16.23	引張強さの欄	402~549	400~550	○	2020.9.19
664	10.5.5	式10.5.16	右辺	$G_s = \gamma \underline{V_s} g$ $G_s = \gamma \underline{V_s} / g$	$G_s = \gamma \underline{V_s}^2 g$ $G_s = \gamma \underline{V_s}^2 / g$	—	2022.1.22 (2022.5.25)
700	10.7.5	式10.7.23	記号凡例	Q : 設計用せん断力 (杭頭に加わる せん断力) (N) κ : ~分布係数で3/4とする.	Q : 設計用せん断力 (C. (4)参照) (N) κ : ~分布係数で4/3とする.	—	2021.8.29 (2022.3.2)
701	10.7.5	式10.7.26	記号凡例	Q : 設計用せん断力 (N)	Q : 設計用せん断力 ((4)参照) (N)	—	2021.8.29 (2022.3.2)
702	10.7.5	<u>C.</u>	設計用せん断力	(追記)	(4) 設計用せん断力 設計用せん断力は、その杭材の曲げ降伏荷重に 対応する応力、または10.7.2 A. (1)に示す設計 用外力のせん断力を1.5 倍以上に割り増した値と することが望ましい <sup>42)</sup> 。	—	2021.8.29 (2022.3.2)
784	12.2.3	別表第6	(3)	$I_s \geq 0.6$ または $q \geq 1.0$	$I_s \geq 0.6$ か $q \geq 1.0$	—	2022.8.1

頁	章・節	項 目		誤	正	ページ 差替え データ	掲載日
822	<u>13</u> . 3. 1	式13. 3. 3	式その他	<a href="#">別紙7(ピーク風力係数の訂正等)</a>		<a href="#">○</a>	2021. 9. 11 (2021. 10. 2) (2022. 3. 2)